

昨今、情報伝達機器の発達により、世界中の人々とながかりやすくなりました。また、業種によっては外国人従業員を雇用する企業も増えています。

国が変われば多くの物事に違いが生じることは容易に想像できるでしょう。また、海外の人と接する中で、その違いに戸惑った経験をお持ちの読者も多いことでしょう。それは、顔つきや体格、言語といった目に見える違いもあれば、それぞれの土地で生活する人々が長年にわたって大切にし、醸成されてきた文化や風習、道徳観といった目に見えにくい違いもあります。

世界のトップ企業を顧客に持ち、国際的に通用する人材の育成に尽力している渥美育子氏は、その豊富な経験から、異文化交流においては、自国文化の理解や語学力も重要であるが、「いかに全体を把握するか」が重要であると主張しています。

その足掛かりとして、渥美氏が開発した「渥美育子式グローバル教育」の中で提唱されているのが「4つの文化コード」です。

4つの文化コードとは、①欧米諸国や北欧の国々にみられる法律やルール・ノウハウを重視する「リーガル・コード」、②日本を含むアジアやラテンアメリカ諸国に見られる人間関係や道徳観に価値の中心を置く「モラル・コード」、③中東諸国等に見られる神の教えに価値の中心を置く「レリジヤス・コード」。さらに④として、歴史や地理の関係から①③が混ざりあった「ミックス・コード」を加えて、世界を4つの文化



## 「その時・その場・その人」 に対峙する

圏に大別しています。

私たちが認識しておきたいことは、日々の生活の中で判断基準や行動指針としての価値の中心や善いと思っている基準が、時代や場所が変われば、それに応じて変わってしまうということです。

また、その価値観も自分の立ち位置によっては、何が正しくて何が間違っているという受け止め方も変わってしまいます。

それは、国の違いだけでなく、同じ地域に暮らし、身近に接している人同士でも、それぞれの立場や経験によって、同じ事象に対して異なる考えを持って生活していることがあります。そして、異なる考えがあるからこそ、私たちは進歩して発展してきたのです。

昨今では、ある集団の中で異なる特徴や特性を持つ人々が共存しながら、それぞれの能力や考え方を活かす「ダイバーシティ（多様性）」という考え方が広く認知される時代となってきました。

そうした時代の中で大切なことは、「それぞれに違いがある」ということを争いの種にせず、成長の足掛かりにしておくことです。それぞれの違いをしっかりと認識し、「その時」、「その場」、「その人」に対してどのように接していくか。それが良好な人間関係を構築し、安定して事業を進める上で重要なのです。

〈自分の常識がすべて正しい〉と決めつけず、広い視野を持って周囲と協調しながら日々を送っていきましょう。